

# Kino Iglu

## 活動スタンス

キノ・イグルーの仕事を一言で言うなら？  
やはり、移動映画館？  
ふたりと話しているうちにそれだけではない、活動のその先が見えてきます。

——活動初期の頃の思い出は？

**有坂**——最初ね、フライヤーを自分たちで配って。1万枚を2人で配って。鎌倉とかまで行ってね。

**渡辺**——そうそう、そうだよ。

**有坂**——(フライヤーを手配りすることについて)言葉って、伝えたいことを全部伝えられたと思いがちだけど、言葉だけだと伝えきれないことがいっぱいあって。実際会えばリアクションとか間、表情とか、相手が無意識のうちにそれを読み取って、(ああ、有坂さんがやりたいことってこういうことなんだな)と、より伝わる。だから可能なら直接届けた方がいいよね。(あんなにプッシュしてくれたイベントなら)って店主がお客さんに進めてくれたり。そういう良い連鎖が生まれたね。

——アキ監督から頂いた「キノ・イグルー」という名前も最初はなかなか伝わらなかったようですね。

**渡辺**——木下さんのグループだと思ってた人もいたもんね。

**有坂**——そうそう、どっちがキノでどっちがイグルーですか？って、結構言われたよね(笑)。

**渡辺**——キノはまだしもイグルーって(笑)。



彼らが野外上映をやり始めた頃、同業者はあまりいなかったそう。その頃の話をする  
と自然とキノ・イグルーが思う映画のある暮らしも見えてきました。

**渡辺**——今はわりとどこでもあるけど、当時野外上映も他でやっている所がなくて。でも、今は「夏って野外上映あるよね」みたいな、1度火がついて皆がやりだすと文化になる。カルチャーになるんだなって。

**有坂**——うん、シーンができるね。

**渡辺**——そうするとそれが変わったことじゃなくて、風物詩になる。そういうことが増えてくると色々な可能性が見えてくる。当時は型にはまっていなかったけど、皆やり始めてパターンが出来ると映画シーンみたいのが出来てくる感じはしてます。

**有坂**——ライバル大歓迎だったもんね。お店とかも含めて映画館じゃない所で上映する人たちがちょっとずつ出て来ていて、出れば出るほど本質とかセンスが問われてくるじゃないですか。選んでもらわれないといけないわけだし。そういう競争が生まれたら楽しいだろうなと思ってはいました。「俺は～派」みたいな会話

が電車で聞こえてくるような。そこまでシーンが出来たら、またその次の風景も見えるんだろなっていう気はしていましたね。

国立博物館での野外上映会、氷の部屋で見るショートアニメ、お寺で見る小津監督作品、。今まで様々なイベントで多くの参加者と触れ合ってきたおふたり。イベント参加者のことについて伺います。

—お客様から言われた心に残る言葉は？

渡辺—この子が映画デビューです、っていうのはよくありますね。

有坂—この前もあったよね。どの映画が良かった？って聞いたら「キートン！」って。バスター・キートン。

渡辺—100年前の映画ですからね。

有坂—子どもが見ても親が見ても楽しいサイレント映画って沢山あるんですよ。だからサイレント映画は子供には分からないっていうんでなくて、観る対象のこともイメージしてみると面白いものはどの時代にもあって。子どもならアニメって考えがちだけど、その枠を取っ払う。そうすると「キートン！」って子どもが言うシチュエーションも生まれるんです。

2011年3月11日、東日本大震災の時、有坂さんは現在拠点としている吉祥寺に越してきたばかりで「36サブロー」という文房具屋さんでイベントを開催している最中でした。



有坂—36でイベントを行っている期間中だった。世の中は当時イベント自粛モードという感じだったけど、そのままイベントを中止にせず、あまり間を空けず震災から3週間後には(ふりきったことをしよう、チャリティ要素なしで!)と、6日間のイベントを行いました。あの時って、テレビを付ければ震災や津波の映像とかで。だから、心をポジティブに、今だからこそできることがあると思って。そして、“やるからには思いっきりやろう”と。後日、イベントに来てくれた人から手紙をもらいました。その内容に自分自身も救われて。

手紙には、このイベントが“ただただ楽しくて救われました”って書いてあったんです。

震災後の日本は全体が暗黙の自粛モードで、イベント事なんか！というような風潮。そういう空気の中で、この決断には有坂さんの強い意志が感じられます。

とはいえ、手紙の言葉に救われたということは葛藤もあったのでしょうか。

アキ・カウリスマキ監督がある老女から言われた「良い映画をありがとう」の言葉のように、有坂さんはこの時の手紙を大切にしています。

なぜキノ・イグルーが固定の場所を持たず、全国津々浦々の、映画館とはかけ離れた場所で映画を上映するのか。「移動映画館」であるわけは？

渡辺—“カフェとか美術館でやっているイベント”。お客さんはそういう雰囲気

良いと思って来てくれてるんですけど、でも実際やっている映画はマニアックだったりするからそれがすごく面白いなって思ったんですね。参加者は何となく雰囲気の良い(おしゃれな)イベントに参加してる。で、面白かったって帰って行くんだけど、実際見ている映画は映画通でも見ないような映画で(笑)。

**有坂**——映画通でも知らないような映画をプリン食べながら楽しんでいる、そういうバランス感覚がすごく良いというか。多分それが自分たちらしさだと思う。僕ら自身オタクですけどアウトプットの仕方が違うというか。誰かの好きな映画を否定しちゃうような人とは映画との接し方も違うし、どういう風にイベント化しよう?と思った時には自分たちみたいな知識がある人に愉しんでもらうじゃなくて、もっと広く「やっぱり映画っていいね」とかでよくて。みんな映画が好きは好きだと思うので、そのきっかけ、久々のきっかけ見たいのを作れたらって思っています。

**渡辺**——「帰りに早速TSUTAYAに寄りました！」みたいなね。あと、お菓子付きの映画上映の時に、予約メールに「お菓子のイベント申込みます」みたいな内容で、映画じゃなくてお菓子の方に惹かれてるなこの人って。

——それで良いって思っているんですよね?  
ふたり——そうそう！



映画を観るきっかけづくりになるならお菓子につられても、会場の良さに惹かれても何でもいい。ふたりに共通している活動の目的は、世の中の人の“映画のハードルを下げる”こととも言えそうです。

「好きな映画は『タイタニック』と書いていいんです。」有坂さんのその言葉の意味を探っていくと、アルバイト時代の風景までさかのぼります。

**有坂**——ビデオレンタル屋で5年間アルバイトをしていて。そこで入社すると「好きな映画は?」って必ず聞く先輩がいたんです。で、新しい子が入って来てやっぱり聞かれて、『プリティウーマン』って答えたら、そんなのは映画じゃないと、先輩が上からいう、みたいな。それが嫌でした。映画って高尚な物みたいなイメージがあって。下手な事は言えない、どうしてもその空気があって。語っちゃいけないんだろうな、俺なんて。みたいな。そこを変えたかった。

**有坂**——僕、嫌いな映画はないんです。脚本がだめでも衣装・デザイン・表現とか1個だけじゃなくて、いくつでも好きな場所が見つけれられる。僕は映画に甘いんです。『アルマゲドン』は映画じゃないと言っていた時代があるじゃないですか。自分もそうだったときもあるけど、でも今それは絶対違うと思う。映画を見て、感動する体験は一人ひとり違うし、その人にとって、その映画がその人の心を動かしたことは真実だから誰も否定はできない。

19歳の有坂さんは、映画館で観た『クール・ランニング』によって本来の自分と出会えました。そして、そこから進んだ1歩から今日のキノ・イグルーと繋がっていきます。映画に自分の居場所を見いだした有坂さん、映画と共に生きてきた渡辺さん。

キノ・イグルーが続いてきた理由には、この2人の関係性も注目しなくてははいけません。

**有坂**——僕は、ジブリも『バック・トゥーザ・フューチャー』もジャッキー・チェンも見てこなかった。あの頃、あの時代の自分で見た方がよかったと思うこともある。でもやっぱり人ってそこを肯定したいじゃないですか。だから、見てこなかった自分は逆に1歩引いて企画を考えられると考えていて。

映画を見ない人の視点を持てるので。

——おふたりに、何か役割みたいなのがありますか？

**有坂**——はじめた時に50年やろうとか、そういう話はしてないけど、どうせやるなら続けたいねって。楽しいことを積み重ねていけば、たぶん辞める理由なんてないじゃないですか。いつまでたっても続くし。続けるためにも無理はしない方が良くってという話は最初にしていて。順也は仕事をしていたし、先に結婚して子供ももいるので、限られた休みの日を全部キノ・イグルーにしちゃうと家での時間もなくなっちゃう。なので来るも来ないも任せた。自主的にお願いしなすって。

**渡辺**——キノ・イグルーでは発想を自由に、型にはまらないことができるんですよ。片方の仕事は型にはまっているので。

——渡辺さんはキノ・イグルーの仕事をするときに何か決めていることはありますか？

**渡辺**——決めてること、、、そうだなあ、、、カッコいい事はないですけど、、まあ無理しないっていう。マイペースでやれればな。多分無理しちゃうと続かないなって。墨もそれで良いっていう感じでバランスが成り立っている所はありますね。



ふたりのちょうど良い距離感、同級生ならではの思い出。唯一無二の相棒という感じでなんだか羨ましい。

人生沢山の選択がある中で、ふたりが選んだ道はワクワクする方、心が動く方でした。誰かが通った道ではないので簡単ではないけれど、素直な自分のままで進んでいける道にして、その道中は、無理をしない。キノ・イグルーが活動をここまで続けてこられたのは、そんなスタンスがあったからでしょう。そして、“映画の力”を誰よりも信じるふたりだから、歩いてこられた道のりです。

「小さくまとまるな」アキ・カウリスマキ監督の励ましを胸に、彼らが次に目指すのは、一体どういう世界なののでしょうか。今後のキノ・イグルーがますます楽しみです。